

木内翁小傳

11
675

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



私

本
子
集

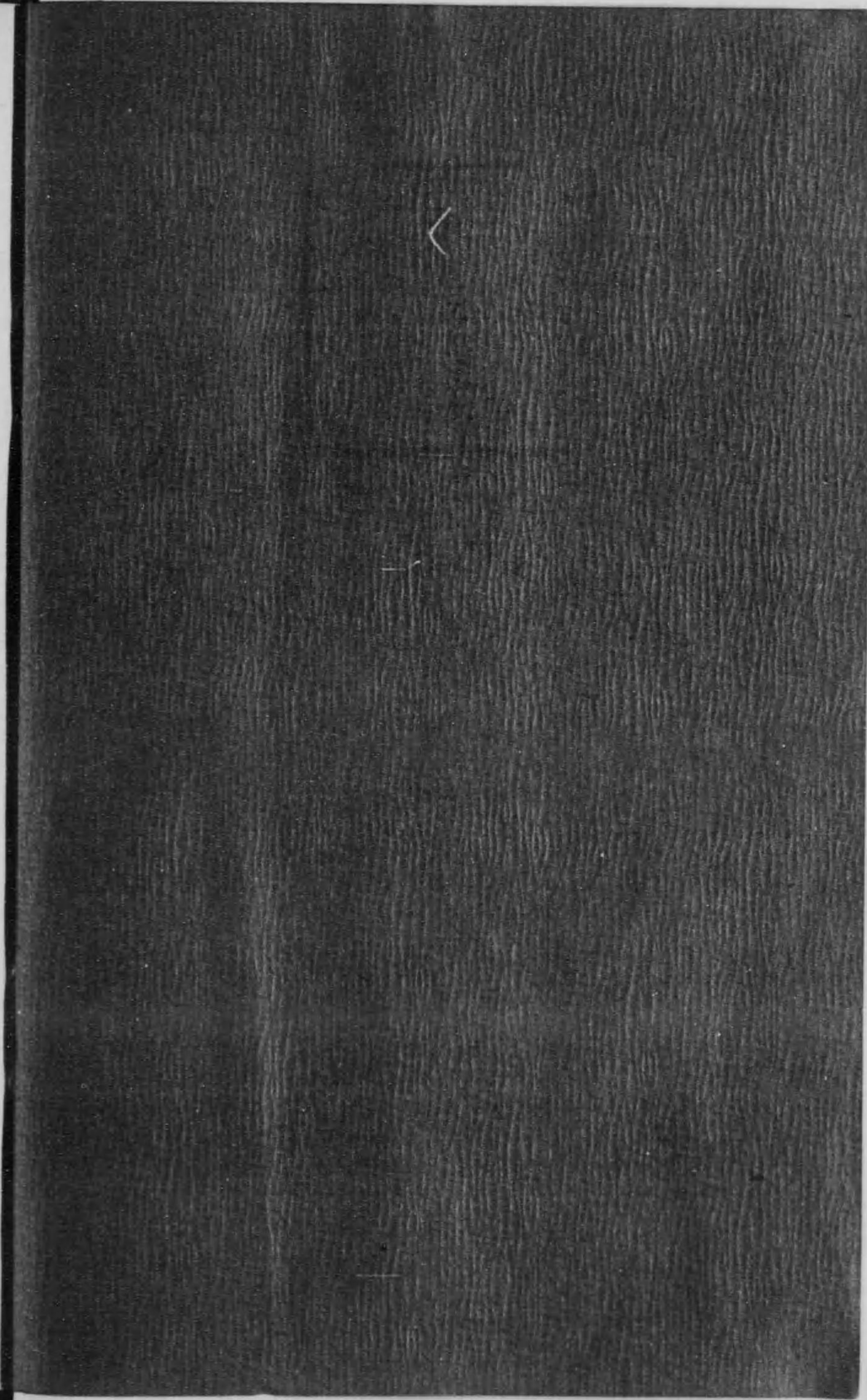
11-615



本
好義小傳

全
寄贈本

大正
11. 11. 15
寄贈



高潔如梅
全卷

字 原 師 子 浦 清

本彫のりま工故本は翁を題して

小刀 子さやう

月とす

里いもの

秋 ねほり



堀

木内喜八翁の工技に於けるや、弱冠にして既に其異能
をあらはし、老齡益其妙致を示す、心を用ゐる縝密に
して、意を存する親切、是を以て其作る所の諸什、精
美と堅實とを兼ね、當代能く追隨する者無しと稱せら
る。翁の家小梅に在り、予の寺島に寓するに及びて相
距る遠からず、予の識る所の雪聲寒月諸子皆翁と交り
て善きを以て、予も亦翁と相識るに至り、杖履時に到
りて或は閑話を交ふ。よつて翁の人となりて解する所
少からず。蓋し翁は自ら其技を樂むの人にして、敢て
其利を求むるの人にあらず。惟能く樂む、乃ち思を覃
し身を勞し、刻苦して而して厭はず、孜孜矻々、精を

窮めて而して後已む、故に能く他人の爲す能はざるも
のを爲す也。既に利を求めず、乃ち衣必ずしも輕暖な
らず、居必ずしも高朗ならず、名必ずしも天下に傳播
せざれども、而も心を安んじて競はず、故に能く晏如
として日夕を送り、悠々然として其生を樂みて悔いざ
る也。内に足る者は外に求むる少しきは、それ翁の如
きの謂乎。晩年多く圓通大士の像を造りて人に貽りて
報を受けざりし如き、亦其襟懷を知る可し。翁逝きて
二十年、今茲其靈を祭り、併せて其作る所を世に觀す
の舉あり。今にして翁を想ふに、其の恬澹の精神、閒
曠の風丰、晋宋の人の如きものあつて髣髴として見は

二

るゝを覺え、歎稱之を久しうす。

大正十一年秋日

露伴道人識

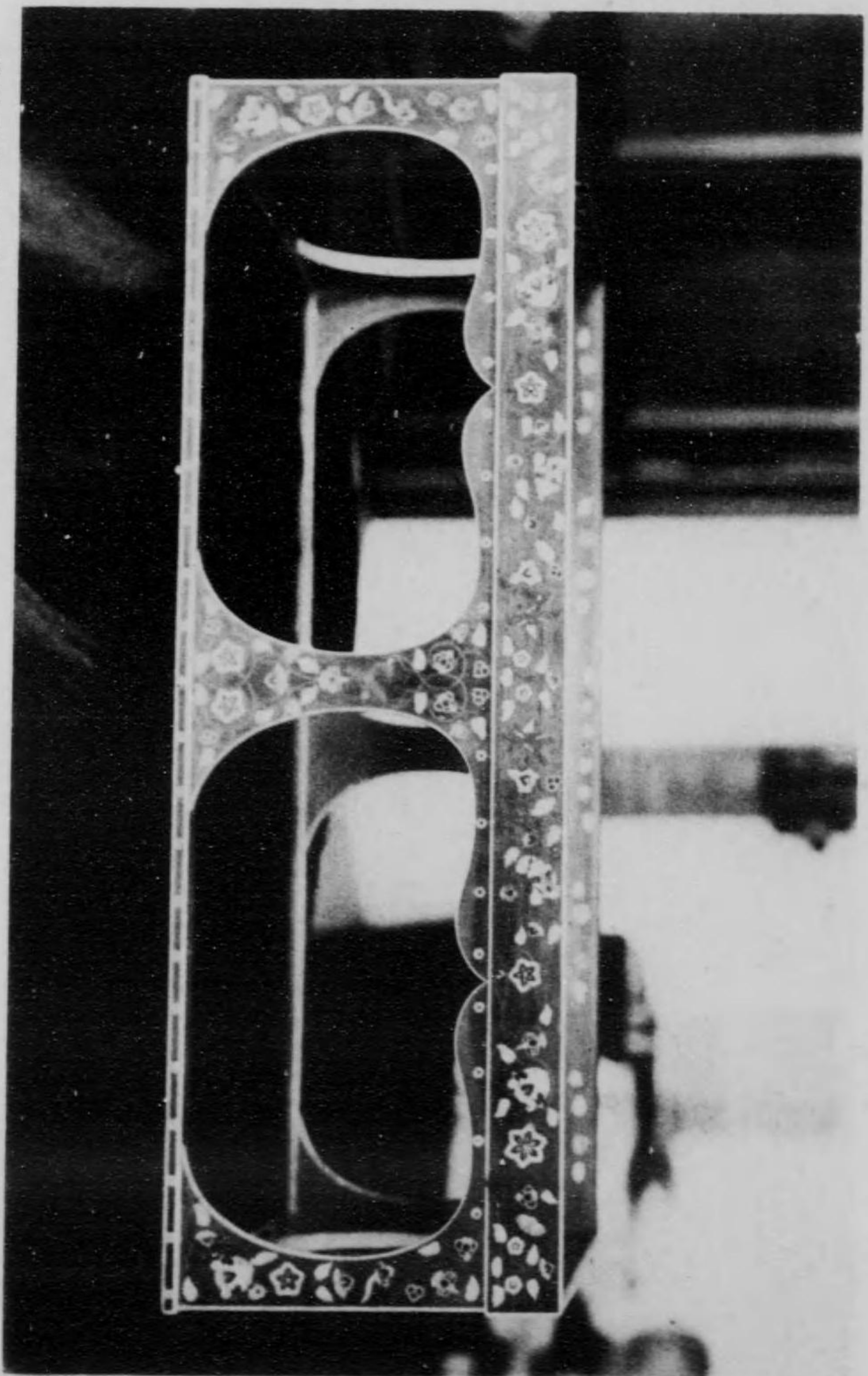
三



木内喜人翁像（設色塑像）故岡蓮杖作

Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), likely a signature or a short note, written on a dark rectangular background.

簡手辭子川品故



藏館列陣省務商農

作翁八喜 局六雙畫木擅柴



藏家爵子浦清

作翁八喜 机桑影透于君四



藏家爵男倉大 作翁八喜 立衝彫透流面扇

藏氏幸正山橫

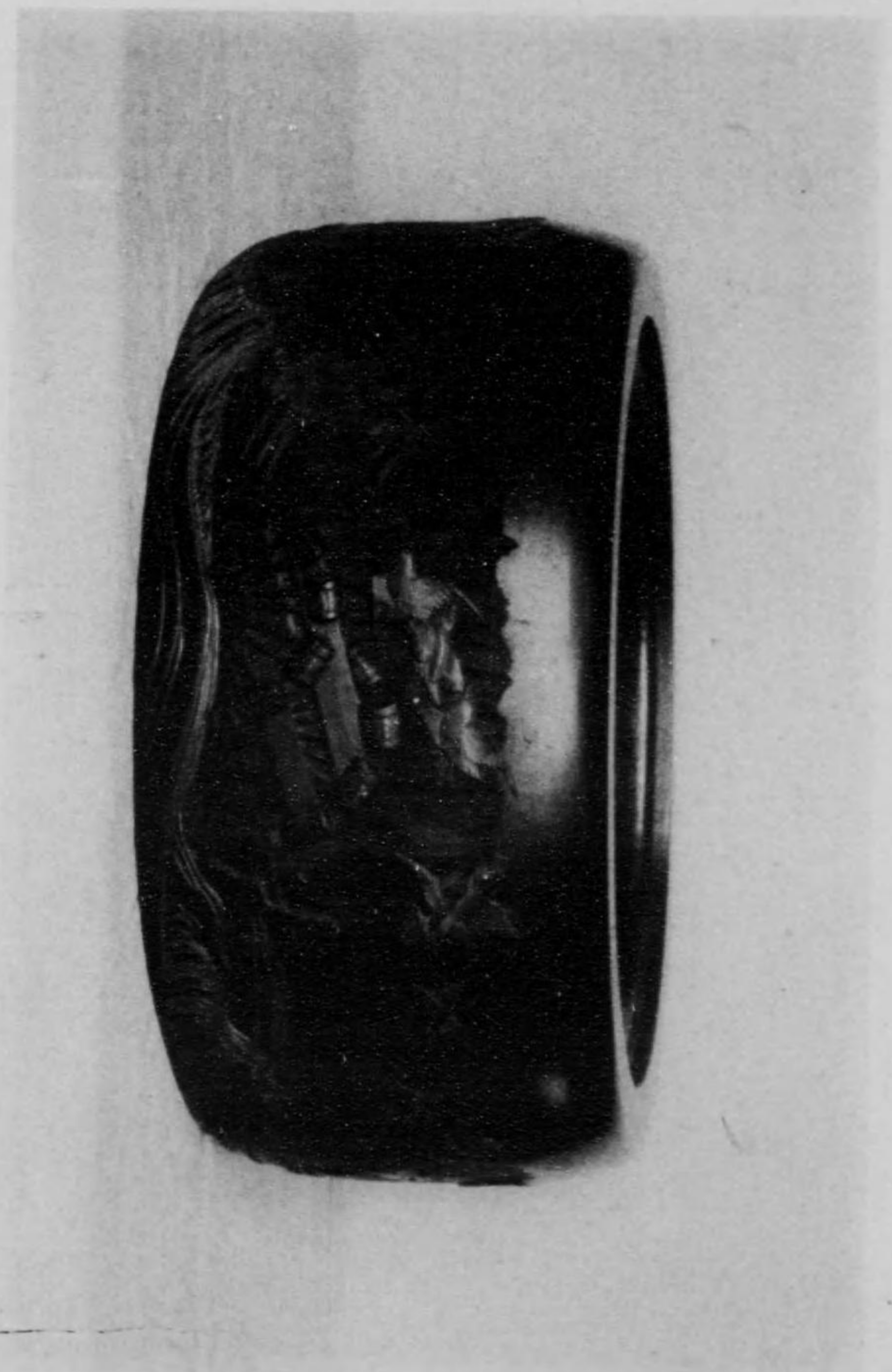
作翁八喜 鉢火嵌象草秋扇銅



藏家靜男會大

作翁八喜

鉢火嵌象車水龍蛇鳥千浪

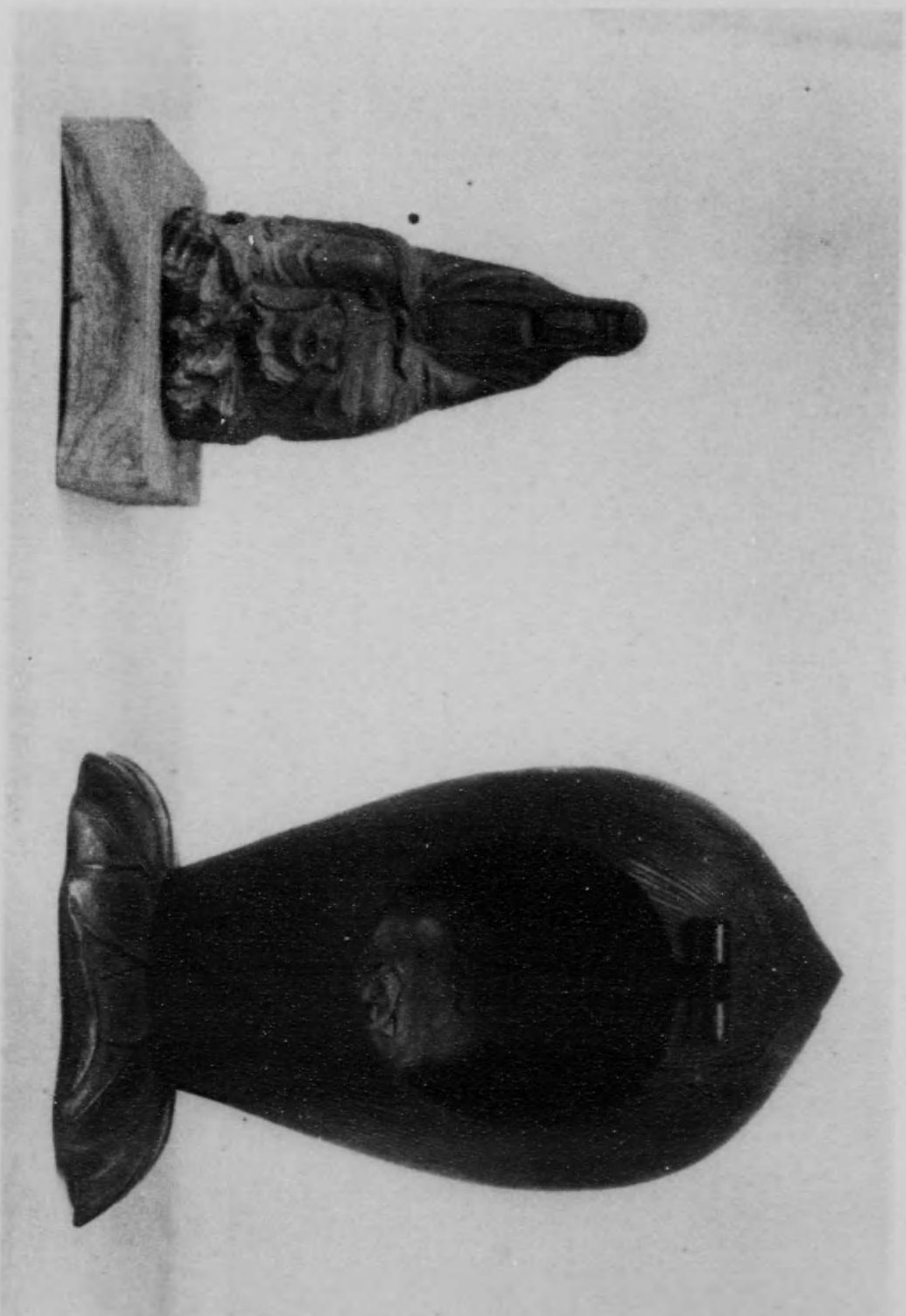




藏氏耶太光澤野 作翁八喜 像磨人

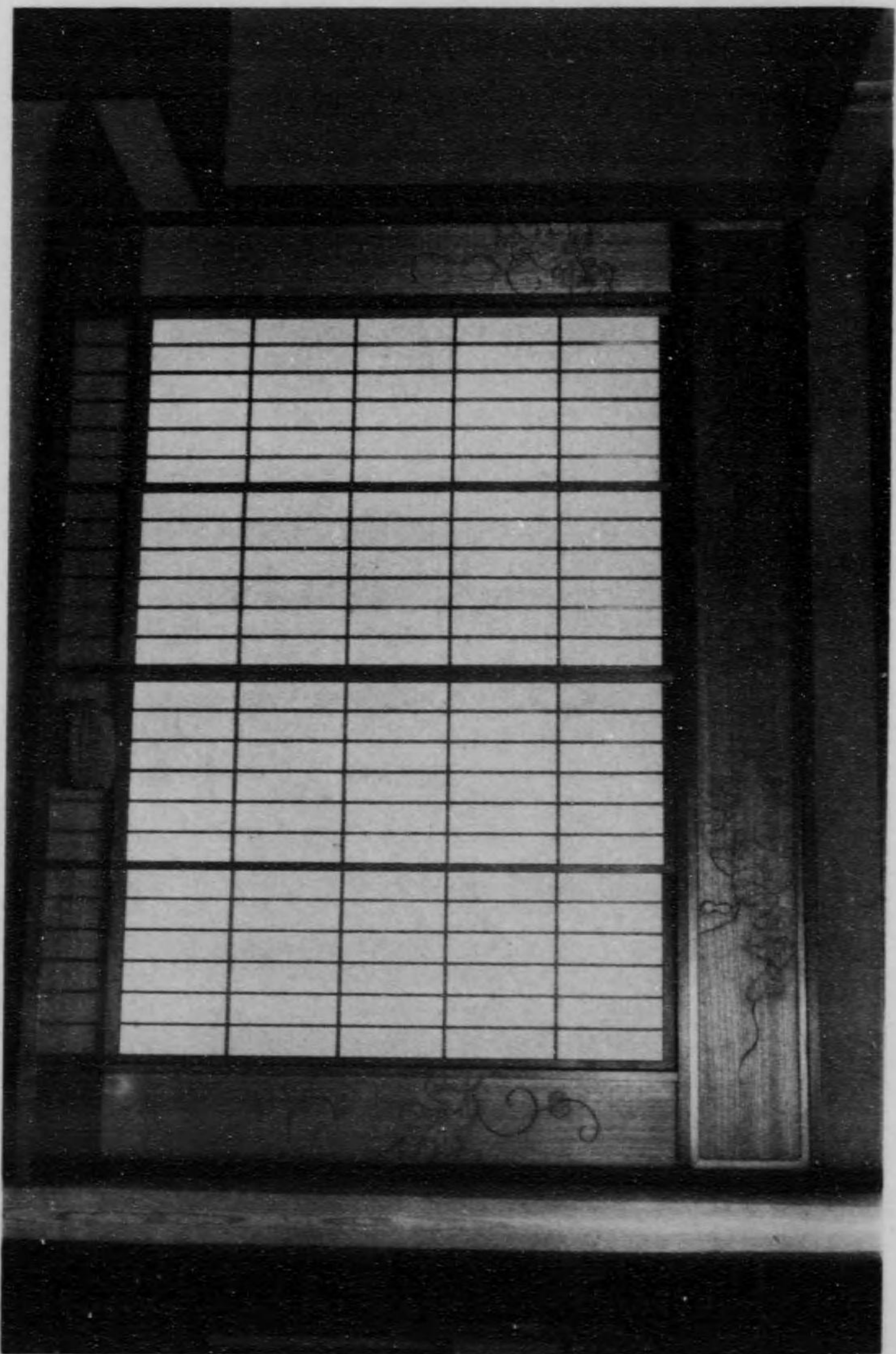


藏氏世信地福 作翁八喜 童牧彫木



藏氏杖進剛下 作翁八喜 像音觀檀白

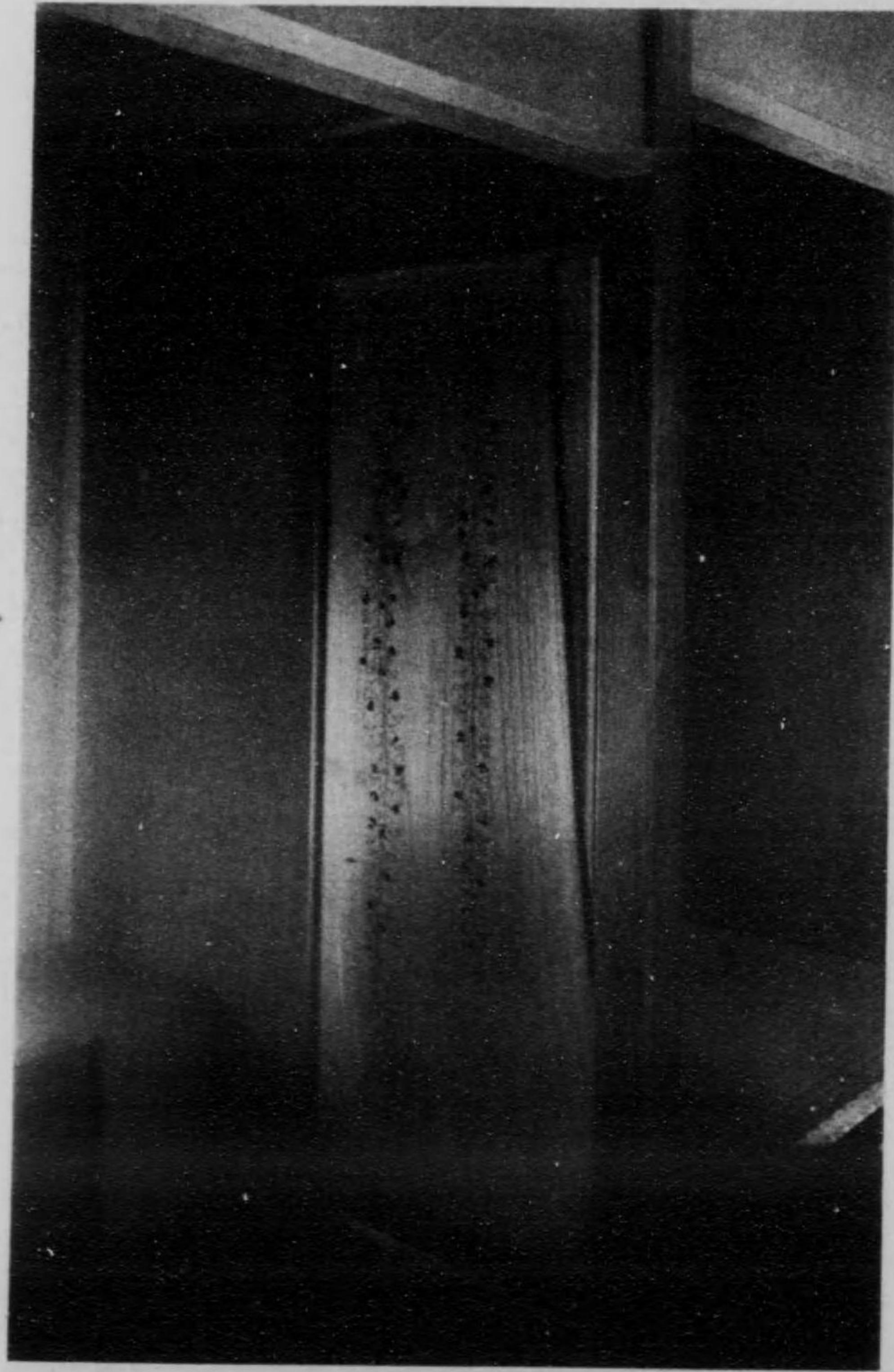
藏氏明莊薩加 作翁八喜 子財華蓮



織氏門衛右平岡森

作翁古牛

箱硯瓢並影透聲瓢胎床



藏氏郎三文岡森 作翁古半 彫透房藤板桐臨床



日兩日五日四月一十年一十正大 日時觀展

でま時五後午りよ時九前午 (曜日土一第)

部樂俱橋本日 目丁一町濱區橋本日 場會觀展

錄 目 品 出

＝會念記翁八喜內木＝

日 西 日 正 日 四 日 十 一 年 十 一 月 十 五 日 日 本 國 立 博 覽 會
(後一土日曜) 千 原 武 部 主 持 平 野 正 朝 主 持
 日 本 國 立 博 覽 會 日 本 國 立 博 覽 會 日 本 國 立 博 覽 會

出 品 目 録

＝ 木 内 喜 八 翁 追 念 會 ＝

木内喜八翁は江戸の人、文政十年深川に生る、幼より手工を好み、少壯山田流の琴師重元平八に就て、琴の製造並に其裝飾象嵌等の技術を學ぶ、中年西洋銃の製法を研究し幕府の軍器製造所に入て小銃臺師の棟梁となる、明治元年加賀藩に聘せられて金澤に赴き、藩の鐵砲製造所に出勤せしが、後ち鞆師に轉じ、劔拔鞆を作りて好評を博したり、同四年東京に還り、爾來専ら指物象嵌彫刻等の業に従事し、同十年内國勸業博覽會に紫檀木象嵌香棚を出品せしより、其技大に世に賞せらるゝに至れり、翁人と爲り恬澹寡欲、名利を求めざるを以て其名多く世に顯はれずと雖も、天稟の技能は之くところとして可ならざるはなし、就中天平木畫の古風を復興して、更に清新の技巧を加へたるは明治の工藝界に異彩を放てるものにして、又實に斯道に殊功ある大家なり、明治三十五年向島小梅の家に歿す、壽七十有六、子なく姪半五郎業を嗣

ぐ、伎倆翁に譲らず、即ち今の半古翁なり、半古翁の次子省古君亦家藝を善くす、父祖三代相紹いて斯業に秀でたるは誠に希有の名家也、

大正十一年十一月

其の次子省古君亦家藝を善くす、父祖三代相紹いて斯業に秀でたるは誠に希有の名家也、

喜八翁作品

一、紫檀木書装雙六局 正倉院御物模作

農商務省陳列館

二、桑製四君子透彫机

清浦子爵家

三、扇面流圖透彫衝立

大倉男爵家

四、日出鶴圖彫刻額面

下岡蓮杖殿

五、圓柏洞浪千鳥象嵌火鉢

下岡蓮杖殿

六、枇杷材彫刻蓮杖

福地信世殿

七、花桐香盒

福地信世殿

八、木彫彩色狸

福地信世殿

九、白檀彫觀世音像

福地信世殿

一〇、木彫牧童 童子、白檀、牛、黒檀

福地信世殿

一一、桑製筆架

福地信世殿

一二、桑製象嵌筆箱

福地信世殿

一三、竹製筆入

福地信世殿

一四、厨子 不動尊安置

福地信世殿

一五、桑製印箱

福地信世殿

一六、ぶりく香盒

福地信世殿

一七、紅梅彫菅公像 百花園寒紅梅古材

野澤光太郎殿

六、柿材彫柿本人麿像

五、木香製彫拔硯箱

四、黑檀象嵌肉池

三、黄楊木孟母斷機圖彫刻煙管筒

小室三惠子殿

三、白檀彫故小室信夫氏像

幸田露伴殿

二、桑製背笈子

市原求殿

二、木彫彩色關羽像

橫山正幸殿

二、桐刷四季草花象嵌火鉢

松家爲吉殿

二、諫鼓鳥彫刻煙管筒

永峰光暉殿

二、白檀彫觀世音像

千谷由太郎殿

二、鍔刀木製香盒

二、白 狸

二、象牙握班竹杖

三、枇杷材製笏

三、桑製蓮圖透彫佛檀戸

三、木 彫 鼠

二、木彫朱彩色鍾馗像

二、桑製ねざめ

二、白檀彫觀世音像

二、木彫觀世音像

二、木彫彩色關羽像

二、白檀彫觀世音像

二、桐彫拔ねざめ

二、桑彫拔硯箱

二、寒紅梅彫菅公像

二、白檀彫觀世音像

二、桑製鏡臺

二、桑製火鉢

二、桑製机

二、紫檀製列拔

二、桑製硯宮

二、厨

二、彫拔香盒

二、花桐香盒

二、法隆寺古材香盒

淡島寒月殿

林九兵衛殿

小室祐夫殿

小平浪平殿

吉田清次郎殿

佐原佐兵衛殿

酒井庄吉殿

浦田治平殿

浦田治平殿

子 三浦乾也作 扇笥王安置

小箱

下繪雪庵

省古作

省古作

四、象牙製透彫飾

五、白檀彫觀世音像

五、白檀彫觀世音像

五、木彫彩色狸

五、木彫觀世音像

六、白檀彫觀世音像

六、桑製菊桐彫長盆

六、桑製針金象嵌煙管筒

六、白檀製觀世音像

六、圓柏彫焰魔王像

六、圓柏彫狸

六、白檀彫觀世音像

六、全

六、香

六、小楊枝入

六、白檀彫觀世音像

六、桐彫拔蕒壺

六、紫檀印入

六、白檀彫觀世音像

六、桑彫觀世音丸額

六、紅梅彫拔印籠

六、木彫彩色お福置物

六、木彫關羽像

六、木彫東大寺南大門高麗狗

六、櫛彫拔百鹿彫刻大印籠

六、竹製線香立

六、白檀彫觀世音像

山邊知之殿

猿家殿

千谷金兵衛殿

會津八一殿

村林榮助殿

加藤莊助殿

坂田忠藏殿

森岡文三郎殿

井上繁子殿

小川竹次郎殿

藤岡てい子殿

森孫三郎殿

吉田りん子殿

松家爲吉殿

佐鳥殿

木内辰三郎殿

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

木内家藏

- 八六、黑檀製釘隠蜂須賀侯爵家用
- 八七、全上日本美術協會用
- 八八、寒山拾得彫刻額
- 八九、木彫觀世音像
- 九〇、木製彫刻如意
- 九一、木彫觀世音像

半古翁作品

- 九二、國寶早雲寺製張文臺硯宮模作
- 九三、金地金銀文字嵌入硯宮書 山縣含壽公 大倉鶴彦男
- 九四、桑製機
- 九五、正倉院御物模作墨壺
- 九六、杉蘇芳塗手箱

- 九七、桑製扇面流四季圖象嵌料紙硯箱
- 九八、桑製萬圖象嵌料紙硯箱
- 九九、桐製古筆和歌象嵌地袋戶
- 一〇〇、桑製金銀裝柄香爐
- 一〇一、桐製貝菊紋象嵌文庫
- 一〇二、桑製銀唐草象嵌平卓
- 一〇三、桑製烏瓜蜻蛉象嵌書棚

- 一〇四、桐製瓢圖象嵌硯宮
- 一〇五、木彫彩色高砂置物
- 一〇六、屋久杉秋草象嵌地袋戶下繪狩野常信古圖

- 一〇七、桑製光悅式紙象嵌硯宮
- 一〇八、紅木製厨子交具金銅作
- 一〇九、桑製瓜畑象嵌料紙硯宮
- 一一〇、赤松製光悅風月象嵌短冊箱
- 一一一、桑列拔藏象嵌乱盆
- 一一二、桐籠目彫火鉢
- 一一三、桐製藤花圖透彫床脇板
- 一一四、赤松製金銀象嵌透彫燈籠
- 一一五、黑柿蘇芳塗獻物臺正倉院御物模作
- 一一六、桑列拔松實象嵌乱盆

- 一一七、桐洞四季圖扇面流象嵌火鉢
- 一一八、桐洞萩象嵌火鉢
- 一一九、桐洞四季圖扇面流象嵌火鉢
- 一二〇、國寶早雲寺製張文臺硯宮模作

- 一二一、椶彫拔香盒
- 一二二、黑柿蘇芳塗獻物臺正倉院御物模作

東京美術學校藏

大倉男爵家

幸田露伴殿

正木直彦殿

森岡平右衛門殿

大倉源太郎殿

森岡文三郎殿

新橋義之助殿

水橋義之助殿

山崎義之助殿

大倉象馬殿

加賀豊三郎殿

中村直次郎殿

宮田哲雄殿

二三、彫刻松花堂書額
二四、彫刻東郷大將書額
二五、茶經彫椀丸盆

梅岡正吉殿

二六、桑製武藏野圖象嵌卷簾箱

上田勝馬殿

二七、白檀彫白衣觀世音像

本間鋼太郎殿

二八、早雲寺裂張文臺硯宮

二九、烏鷲圖象嵌衝立

三〇、桑製 蕘 盆 一對

三一、紫檀製木書櫛笄

山邊知之殿

三二、麴 蓋 茶 盆

三三、香 盒

津村重舍殿

三四、國寶早雲寺裂張文臺硯宮

模作

林 九兵衛殿

三五、桑製柳箱型火鉢

淡島嘉兵衛殿

三六、木彫彩色鶴龜香盒

河合佐兵衛殿

三七、桑製銀唐草象嵌平卓

大橋新太郎殿

三八、無憂樹鏤形虫象嵌額面

三九、桑製木書机 並料紙硯箱

木 内 家藏

四〇、神代杉銀文字嵌入手箱 杉子爵書

四一、桑製柄香爐

四二、紅木製線香立

四三、竹柄銀裝塵尾

四四、桑製綱代彫寫象嵌手箱

四五、桑薄象嵌硯箱

四六、桑釣瓶形蕘盆

四七、杉蘇芳染唐櫃 正倉院御物模作

松家爲吉殿

四八、桑製南天象嵌楊枝入 千谷由太郎作

省古子作品

四九、紫檀木書菊桐手宮

水橋義之助殿

五〇、桑製彫拔桐花象嵌卷蕘宮

宮田哲雄殿

五一、桑製四季扇面散圖象嵌料紙硯宮

前田南齊殿

五二、桐製貝菊桐象嵌式紙短冊宮

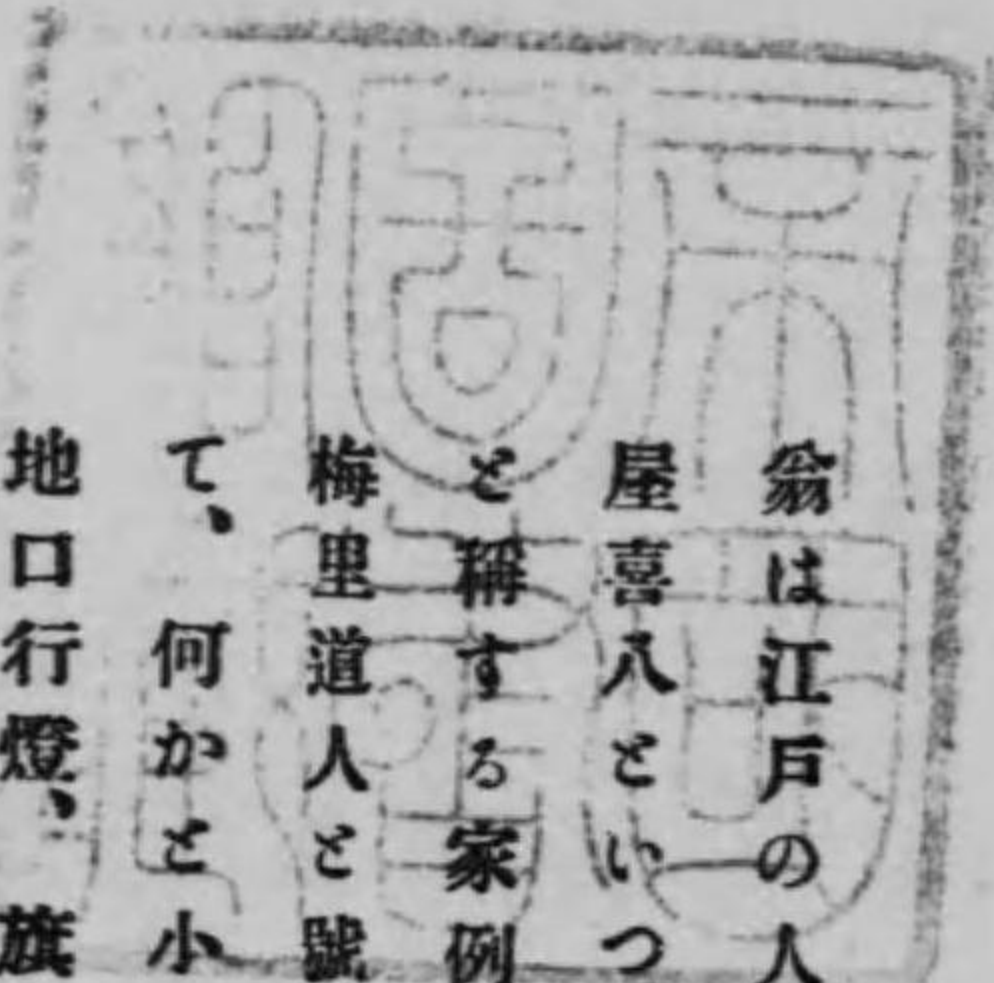
五三、桑製百合象嵌手箱

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

寄古千非品

...

木内喜八翁小傳



翁は江戸の人、文政十年五月十日といふに深川佐賀町で生れた、父は銚子屋喜八といつて舟大工の棟梁であつた、代々幼名を友吉と呼び、後に喜八と稱する家例であるから、翁も始め友吉、後ち通稱喜八、諱は喬求、晩に梅里道人と號した、生來器用な質で、幼少の時から家庭の大工道具を弄して、何かと小細工をして樂みとした、深川八幡のお祭の時などには、萬燈地口行燈、旗幟棒等を造り立派な腕前を示して、既に天才肌の片鱗を閃めかしたのである、併し腕白盛りの頃には、近所の子供等と喧嘩の絶間がないといふ有様であるが爲めに、一旦は房州白真津なる母の里方へ預けられたが、やがて一年許りにして江戸へ還つて來た、天保八年十一歳の夏に日本橋山田流琴師二代目重元平八の方へ弟子入をして、琴の製造、寄木籠甲張象嵌等の技術を學んだ、初代重元平八は山田檢校の弟で、檢校好みの莖

二
蒲形の琴を創作した名工であつたが、二代目平八の頃には初代の門人重元辰五郎といふのが上手で、重元の家職は主に辰五郎が掌つてゐたのであるから、翁も辰五郎に就て習つたのであるが、早く上達して十三歳の時にはや菖蒲形の琴を一手で仕上げるやうになつた、然るに十六歳の年に辰五郎が死んで、師匠に離れたが爲め、轉じて築地明石町の十一屋といふ舟大工棟梁の弟子となつた、こゝでも勉強して間もなく優に二人前の仕事をすゝるやうになつた。然るに十一屋の棟梁は翁が未だ弱年なるを蔑視して、工賃は一人前しか與へなかつた、そこで翁は怫然として同家を去つた、其後は家庭に在て、唐木象牙類の小細工ものを始めたが、十九歳の時偶豆印籠二個を造つて、父の知人なる兩國橋町の小間物商某に見せれば、某は大に其の巧妙を賞して金三兩で買取つた、其頃普通職人の工金一日一朱位が上の部であるが、翁は一日に印籠二個を仕上る、一個二朱の價で二個で一分の仕事をするのは非凡の腕前である、その二個に對して金三兩を貰つた

三
當時間口二間の家屋が二兩二分で出来るといふ時代であるから、翁も大に喜んだわけである、其内弘化四年二十一歳の年の七月に父の喜八が歿して翁は一家の責任者となつたから、自ら益其業に勵まなければならぬことゝなつた、嘉永六年亞米利加の使節ペリーが來朝して、幕府へ六連發手銃を贈呈した、其時松平下總守の注文で同藩の鐵砲師松家定七から頼まれて、右の手銃を模造した、それから西洋銃に着眼して其製造法を研究し、又其頃輸入した西洋の新知識を應用して、或は庭前に樽を埋めて瓦斯を造り、之に青竹を通して燈火を點し、又蒸溜機械を用ひて藥液を製造するなど、種々なる試みをやつた、此頃恰も幕府では本郷の櫻の馬場に軍器製造所を新設し、之を櫻の馬場の御小屋と呼んだ、江川太郎左衛門が其奉行となり各藩から名工を選んで鐵砲其他の製造を創めた、安政二年翁は右の松家定七の推薦によつて此御小屋へ入つて小銃臺師の棟梁となつたが、此御小屋も間なく閉鎖されたが爲めに、又々家で小細工ものを始めて、専ら横濱の

貿易商森屋といふ者の注文で、唐木象牙細工の貿易品を造つた、それから明治元年に加賀藩へ三十俵四人扶持で抱へられて、其春に姪の清三郎、半五郎の二人を伴れて金澤に赴き、藩の鐵砲製造所へ出勤することゝなつた然るに同所の係役人國友勝之丞といふは翁か櫻の馬場に勤めた頃の弟子であるのが、今は上役に居るのであるから、翁は面白く思はなかつたこともあつたらう、他にもわけあつてか、後には右の製造所へは勤めず、市中へ出て刀鞘の製造に従事した、之は主に刀商戸出屋といふの依頼であつたが其内刳抜の鞘を作つたのが評判となつて、遂に藩主中納言様の御所望で、鐵刀木二重の刳抜短刀鞘を作り、之に白蝶貝を以て白蛇を象嵌したのが、御意に適つて賞賜を受け、益好評を博したのである、然し、翁は私かに思ふに、百萬石の御城下でも田舎は田舎である、如かず江戸へ還つて大に腕を揮はんにはといふ意氣で、同四年に金澤を辭して東京へ歸つて來た、歸て見ると恰も御維新の際であるから物情騒然として世態は次第に變化しつ

つある、やがて廢刀令が發布せられて鞘師の仕事もなくなるやうになつた又翁自ら考ふるに刀劍銃砲の如き殺生の兇器を造るは我が本意にあらずとて、是迄用ゐ來た器械道具一切を破棄して、其業を廢した、其頃は深川の福住町に居て、爾來専ら指物象嵌彫刻等をやつてゐた、其内に明治十年の第一回内國勸業博覽會開催となつて、維新の騷擾以來顧みられなかつた美術工藝も漸次復活の曙光が見えて來た、そこで翁は多年蘊蓄の伎倆を顯はすべき時こそ來たれとて、同會へ紫檀製寄木象嵌香棚を出品した、此香棚は牙角黒檀等を用ゐて細密の紋様を象嵌したもので、其精巧大に好評を博して、鳳紋賞牌を授けられた、此頃から時の内務卿大久保利通公を始め、品川彌二郎子、杉孫七郎子、小室信夫、山本五郎、西村勝三、福地源一郎等諸氏の後援を受けて、其作品を世に紹介せられ、高貴縉紳の御用命を蒙るやうになつた、翌十一年に福地櫻痴等の勧めに依て居を向島の柳畑に移して、古藝術の研究に没頭し、遠くは正倉院御物の古風を欽仰し、近くは

光悦、光琳、破笠等の遺風を景慕して、益技巧の鍊磨に怠らなかつた、十四年の第二回勸業博覽會には正倉院御物を模造した木象嵌經臺を出品して妙技賞牌を受けた、其薦告狀の文中に「紋様の嵌接鮮美にして品位優逸なる尋常芝山象嵌の比に非ず」と賞せられたのを、翁大に之を喜んだといふことである、其後二十年の東京府工藝品共進會に牙木象嵌紫檀手箱を出品したる外、展覽會共進會等のある度毎に授賞せられた、又翁の特殊の技術益世に認められて、高等工業學校から聘せられ、又宮内省から出仕の命を受けたこともあつたが、いつれも老年の故を以て辭退した、宮内省の方は嗣子半古をして代らしめて、正倉院御物整理掛へ出仕せしめた、斯くて晩年は悠悠自適の境に逍遙して、明治三十五年八月十五日といふに小梅の家に歿した、享年七十六、法諡して清山喜道信士と云ふ、本所區林町彌勒寺中龍光院に葬つた、配某氏故あつて離縁した、子がなかつたから、姪の半五郎を養つて嗣子とした、即ち今の半古翁である、

翁人と爲り温良、風神仙佛の如き人であつたが、仕事の手は敏捷なるが爲めに、櫻の馬場の御小屋に勤めてゐた頃同輩渾名して鬼と呼んだといふことである、意志は非常に強固な人で、一事に没頭すれば一心不乱にして更に他を願ない、嘗て禪に志し小石川白山龍雲院の渡邊南隱師の室に入て其鉗錠を受けたことがある、其頃毎日白山へ通ふとなつたならば、親戚へも友人へも更に訪問せなまいといふ風である、又製作するにも一風變つたところがある、晩年に小室信夫氏から唐白檀の一木を乞ひ受けて、數百體の白衣觀音を刻み、又井上侯爵から貰つた南都藥師寺の古材を以て彫抜の香盆幾十を作り、その表に阿字、裏に卍字を彫つて親友知人に頒つたことがある、その澤山の觀音を作るにも尋常ならば始め一度に木取をしておいて、それから一々彫刻を加へるのであるが、翁は之と異て一體つゝ始めの木取から仕上までやる、而して觀音像一體が出来ると袖へ入れて出て往て、どこかへやつて歸る、往々そのお禮物を持って來る人があつても固より取らな

八
い、又彩色木彫で狸を數多造て老後の樂みとしてゐた、翁は生來天才肌の人で、異常の工風力に富み、技巧亦比類稀なる敏腕を示した、而も何事も熱心にして徹底せずんば止まざる氣質であつたから、幕末の世情不安定なる時代に生れ、幼少から變轉極りなき境遇に處して、種々なる事業に従事したが、所謂之く所として可ならざるはなく、いつれの技術にも非凡の伎倆を揮うて成功せざるはなかつた、就中木象嵌の技巧に於て尤も卓越し尤も得意とする處であつた、殊に木竹象牙等の異質のものを一様に使ひこなした腕前は前人未到の技とも稱すべきもので、それが或は彫刻の妙技と調和し、或は指物の巧技と相待つて完美のものを造り出したのである、翁常に自ら雲州の小林如泥奈良の森川杜園に比してゐたさうである、杜園は古代彫刻の摹作に秀で、翁は古代工藝の模造に勝れたのは、同時代に於て東西一雙の名手と稱すべしである、かゝる名工でありながら是まで喜八翁の名があまり世間に知られなかつたのは、全く翁が恬澹無慾の人で、名利

に無關心であつたが爲である、翁が七十有餘年の長生涯に於ては交はるところ博く、友人少からずあつたが、就中世に知られたる人々は、寫眞師下岡蓮杖、北庭筑波、蒔繪師柴田是眞、池田泰眞、陶器師三浦乾也、畫人高島千載、長谷川雪堤、吉澤雪庵、山名貫義、野澤堤雨、學者依田學海、煎茶家松井楓川亭等であつた、

木内喜八翁製作年譜略

▲明治元年より加州金澤時代

一 鍔刀木二重剝抜白蝶貝白蛇象嵌短刀鞘

現藏者未詳

白蛇象嵌下繪狩野宗益 下草蒔繪

▲明治六年より十年迄深川福住町時代

一 水牛製火藥入 徳川慶喜公所用

一紫檀製木書香棚

宮内省御藏

明治十年内國勸業博覽會出品 鳳紋賞牌 宮内省御用品

一桑鶉象嵌煙管筒 故本多晋氏所用 本多靜六氏藏

一同 故小松精一氏所用

一桑菊桐象嵌蓑盆 故根本茂樹氏所用

一同 故小林猶右衛門氏所用

一桐桐秋草象嵌火鉢 村 林 氏藏

一扇面流透彫衝立 横山正幸氏藏

▲明治十年より廿一年迄向島柳畑時代

一木彫彩色關羽 十一年 市原求氏藏

一木彫牧童 十二年 福地信世氏藏

一正倉院御物模造紫檀木書雙六局 農商務省陳列館藏

明治十四年内國勸業博覽會出品 妙技賞牌

一酸漿並楓透彫欄間

鹿島精一氏藏

一桑四君子透彫机

清浦子爵家藏

一桑剝抜料紙硯筥泰真蒔繪 故小室信夫氏所用

一同 是真蒔繪 同

一燕象嵌裏爪唐草彫刻欄間 蜂須賀侯爵家藏

一黑檀象嵌釘隱各種 二十年 同

一紫檀木書手筥

明治二十年東京府工藝品共進會出品 職工學校買上

▲明治二十一年より向島小梅時代

一宮城北謁見所暖爐裝飾 二十二年

一深川岩崎邸床障子腰板等彫刻象嵌製作 二十二年

一乾也作燭魔王桑製厨子 林九兵衛氏藏

一皇太后職御用紫檀獅子象嵌手筥 二十三年

- 一 菊紋象嵌暖爐上鏡縁 二十五年 故品川子爵所用
- 一 彫嵌百鬼夜行圖額 二十六年 同
- 一 木彫お福置物野澤堤雨彩色 同年 木内家藏
- 一 木彫摹作東大寺高麗狗 同年 同
- 一 楓刻抜百鹿彫刻大印籠下繪堤雨 二十九年 同
- 一 紅梅刻抜彫印籠 同年 同
- 一 菅公木像 百花園紅梅古材を以て所造 百花園 佐原佐兵衛氏藏
- 一 同 野澤光太郎氏藏
- 一 木彫鼠 厨子省古作 二十九年 千谷由太郎氏藏
- 一 浪千鳥蛇籠水車象嵌火鉢 三十年 大倉男爵家藏
- 一 蓮杖 故下岡蓮杖氏所用 二世下岡蓮杖氏藏
- 一 木彫小室信夫氏夫妻像 小室三惠子氏藏
- 一 菊桐紋象嵌火鉢 喜八半古合作 故澁澤喜作氏所用

- 一 木彫品川子爵夫人像 三十二年 品川子爵家藏
- 一 木彫鍾馗 三十三年 千谷由太郎氏藏
- 一 木香製彫抜硯箱 同年 野澤光太郎氏藏
- 一 木彫人磨像 三十五年 同

木内半古翁略歴

一四

半古翁は江戸神田白壁町の上總屋といふ履物商土屋喜三郎の次子で、安政二年十一月二十五日に生れた、母は木内喜八翁の妹で、名を登女と呼んだ翁通稱半五郎、半古は其號で、又梅里、梅仙等の別號がある、四歳の年に母を喪つて、伯父喜八に養はれて其嗣子となつた、慶應三年十三歳の春から養父喜八に就いて唐木象牙の小細工指物等の家藝を習ひ始めた、翌明治元年に父に隨て金澤へ往つた、滯留三年の間常に父の膝下において修業に怠らなかつたが、四年の春東京に還つて、其頃から近所の學者に就て漢籍を學び、又土佐派の畫師高島千載の門に入て畫法を習ひ、粉本の模寫などに勉めた、或時父が熊谷在へ旅行した不在中に、父が依頼をうけてゐた菘蕘盆を作つた、父が歸つて見ると其出來立派で優に一人前の仕事をやる迄に上達したのを賞せられて、以來時々父の代作を許さるゝやうになつた、

それから二十歳の時に小室信夫氏の注文で、扇面流しの圖を透彫にした衝立を製作した、其技益進歩して既に一家の風を成すに至つた、明治十一年深川福住町から向島の柳畑に轉居した、此の附近にゐる畫人野澤堤雨、陶工三浦乾也などは、いづれも父の親友であるから、日夕往來して有益なる指導を受け、陶磁七寶蒔繪の諸技並に象嵌材料の選擇、染色の方法等の研究をした、父喜八が第一回第二回勸業博覽會へ出品した香棚、經臺などは皆翁がその工を助けたものである、爾來専ら象嵌技術に力を致し、遠く天平の古風から、近くは光悅、光琳、乾山等の遺作を參考として熱心に研鑽を重ねつゝあつたが、其内明治二十一年に文部省に全國美術品取調といふ事あり、九鬼男爵、岡倉覺三氏等に隨行して、京都、大阪、奈良、滋賀、兵庫地方を巡遊し古社寺の什寶調査に従事した、此行古藝術の研究に尤も便宜であつたから、翁の得るところも少からざるものであつた、二十三年の第三回内國勸業博覽會に桐製菊紋象嵌の手箱を出品した、是が翁の公會

一五

へその伎倆を示した最初であつた、三十四年日本美術協會展覽會へ黒檀四季花鳥圖象嵌書棚を出品し、東宮職の御用品となつた、其他博覽會展覽會等の諸會へ出品する毎に高貴の御用品となり、また政府御買上の榮譽を蒙つた、二十六年の秋宮内省に正倉院御物整理掛の設置せらるるに當りて召されて出仕した、整理掛は皇太后宮大夫子爵杉孫七郎氏が掛長で、掛員としては侍從西四辻公業子、堀博、稻生眞履三氏、其他屬官數名の任命があつた、技術家としては半古翁、金工田村宗吉、經師勝矢久次郎の三人であつたが、後漸次に増員せられて二十餘人に及んだ、工場は始め赤坂離宮の東宮殿下御學問所に接續した長局であつたが、後東宮御所御造營等の爲に諸所に移されて、最後には麴町三年町御料地内舊博物館であつた、かくて三十八年に御用濟となつて整理掛は閉鎖となつた、翁は同掛創設以來十有三年の間始終精勤して親しく天平美術の精華に接したのであるから、深く古器の形狀、作風に通達し、能く技巧の眞髓を捕捉して、大に自得すると

ころがあつた、爾來専ら向島の家にありて、次子省古君と共に木竹牙角貝甲玉石等の象嵌、彫刻、指物等の意匠並に製作に従事せられた、就中先年來森岡平右衛門氏の依頼によりて製作中である同氏邸茶室客席の座敷廻りの配置意匠、床天井欄間等一切の建築裝飾は、翁が多年の蘊蓄を傾け盡して努力しつゝあるもので、翁晩年の大製作と稱せられてゐる、又翁は製作の傍日本美術協會、東京彫工會、大日本水産工藝協會等を始め美術團體の委員、評議員、審査員、鑑査員等の役員となりて、絶えず斯道の奨励發達の爲めに盡瘁せられつゝある、大正五年山田檢校の銅像を江の島に建設せんとの議のあつた時、翁は喜八翁が少壯山田流の琴師重元の家に於て修業した縁故から、山田重元兩家との交誼淺からざるものあるによりて、選ばれて工事監督の任に膺り、同七年に之を成功した、其間原型の考證から臺石其他の設計に就て、翁は色々世話をして能く報本反始の義を全うせられた、翁曾て書道に志し、始め友人古谷海東に就て筆法を受け、又今泉雄作

氏等の言に従て、正倉院古文書等の古風を研究して、益其趣味を感得し、遂に山縣公爵等の賛助を得て、文字の象嵌法を工風するに至り、技次第に熟して好評噴々たるものである、翁今茲六十有八歳、尙矍鑠として意氣壯者を凌ぐの概あり、更に老成圓熟の製作に向て世人の囑望するところ多大なるものである、

木内省古君略歴

省古君、通稱友吉、半古翁の次子で、明治十五年七月十六日に向島須崎町の家で呱呱の聲を上げた、資性醇厚、幼少から手工が好きで、小學校へ通ふ餘暇には常に祖父喜八、父半古兩翁のもとにあつて、象嵌、彫刻、指物等の技術を習つた、十七八歳の頃から前田貫業の門に入て畫法を受け、又繪卷詞書古筆帖などを撫して上代様の書を學んだ、かくて學藝の素養を積み、伎倆も漸次に進み來つたが、明治三十七年の春から父翁に隨て宮内省の正倉院御物整理掛へ出仕することゝなつたのは、恰も斯道最高の學府へ入つたやうなものであるから、修業研究の上には寔に千載一遇の好機會であつた、正倉院御物の古器は申すまでもなく盛唐藝術の精華を傳へたもので、金銀平脱、末金鏤、螺鈿、玳瑁、木畫、象牙撥鏤等の如き、いづれも天平時代特殊の工藝にして、中には後世全く其傳法を絶つたものもある、

君は整理掛に於て親しく此等希代の珍寶に接し、手自ら此等の修覆に従つたのであるから、それから天平紋様の意匠、色彩の調和等を得し、その廢絶した技術に就て専心研究に没頭した、殊に玳瑁装と木畫装に就て一工風を試み、遠く奈良朝の技術を復活して一新機軸を出さんと志した、大正四年水産物を工藝に應用するの技術が從來閑却せられてゐるのを慨して、その進歩發達を計らんが爲に、大日本水産工藝協會なるものを創立せられ水産界の先覺牧朴眞、下啓助兩氏正副會頭となる、君は同志と共に其理事となつて専ら其實務に與かることゝなつた、同六年朝鮮李王家美術品製作所の招請に依り、牧朴眞氏の推薦で京城に出張した、其用務は李王家と梨本宮家との御婚儀御聽許御禮の爲め李王家より兩陛下へ御献上の品々の調製に關してである。御品は御書棚、御机、御硯箱、御文庫等の皆螺鈿裝飾をなすもので、朝鮮の螺鈿工を督して其製作に従事した、かくて朝鮮に滞在すること正に一年の間に、遍く歴代文化の跡を踏査し、特に螺鈿玳瑁

製作の朝鮮様式に就て研究を遂げ大に得るところあつた、十年十月には正倉院曝涼に際して拜觀の榮を蒙り、益斯道の研鑽に資するところ少からざるものがあつた、君嘗て指物の名家前田南齋氏と共同製作を約して毎年一二品の試作を美術協會、彫工會、水産工藝競技會等へ出品するを例とし、其他諸種の公會へ出品したるもの皆優賞を得ないものはない、最近平和記念東京博覽會の美術館に於て人目を惹いた四季草花の象嵌模様桐製大火鉢の如きは君か近來の努力作として高評を博したものである、君又水産工藝協會を始め諸會の役員に任して斯道の爲めに盡瘁せられつゝあることも世人のよく知る所である、君内に在りては祖父喜八翁以來の家技を大成するの重任を荷ひ、外に在りては大正工藝界の中堅となりて、斯道の革新發展の爲に奮闘すべき位置にある、世人は洋々たる君が前途に對して甚大の期待を寄せ、又刮目して君が進境を看んと欲するものである、

大正十一年初秋

相見香雨誌

喜八翁と私

梵雲寒月

明治三十年のもう年末、はじめて喜八翁が私の梵雲菴を訪はれました、そして結構な香合みだれ桐の古代模様ある内は鎗匏で突た様に自刻されし大さ二寸程の物を、むぞうさに袂から出されて恵まれました、是は私の爲めに殊更作られて持参された品で、翁の細工の高妙なるを觀、そして其の香合の蓋の裏に毛彫の落款に七十翁とありましたので翁の歳を知りましたがその頃私は庭にバフコーチンといふ洋鶏を飼つて居たので、それから何んでも鶏の話が出て、翁は自分では生物の命をとることは尋ねといふような話をされたと思ひますが、夫からは毎日かならず午前遊びに見えられ二三時間は坐談して歸られしが、歿せらるゝ二三月前迄一日もかゝらず六年間見えられしその氣根のよさは是が技術の上にも顯はれ名品が出来しも無理

ならぬ事と首肯されます、そこで私が何かの用でも出来き空菴の時は、非常に失望され何處へ行かれしかと庭口に立たれしまゝ實に御氣の毒な様に見えしと、私か歸庵の時家内がいふ位で、晝すぎ又々見えらるゝ折もあるので、どんな面白いお話かあるのですかと家内からいはれました程でしたが、是といふ事もなくたゞ私の小室にある何となき品に付き話の糸口がほこれ翁か問はれば答へ、私か翁に問へば、如何なる事もかくされず、砥石に付て聽けば夫を明細に述べられ、象牙の着色、漆の塗方、船玉は何、船釘の名は何々、皆實際經驗の話をせらるゝので、私の筆藏といふ簡冊に有益の翁の雑話が多く筆記されて、今もその時をまのあたり思ひ出る便宜ともなり、翁が製作の香合とともに翁の形見として座右の珍と私は感謝しつつ、燈下に獨りその筆藏をうち觀やりて翁の廻想を記しました、

大正十一年十一月五日印刷
大正十一年十一月十日發行

東京市本所區向島小梅町二百五十五番地

編輯兼 木内喜八翁記念會
發行者 代表者 正木直彦

東京市小石川區白山前町七十四番地

印刷者 相見繁一

東京市小石川區白山前町七十四番地

印刷所 藝海社

東京市本所區向島小梅町二百五十五番地

發行所 木内喜八翁記念會

11
615

終

